

令和元年度 学校・家庭・地域連携サポート事業

地域学校協働研修会

# 学校支援活動研修会

主催：福島県教育委員会

- 目的：学校支援活動推進上の課題を多様な立場から明らかにし、より継続的・安定的な活動をめざす手がかりをつかむ。
- 日時：令和元年10月25日（金）13：20～15：00
- 場所：福島市吾妻学習センター

## 講話 「つなぐ・育む・地域のコーディネーターとして

～コーディネートはこうでねえと～

いわき市常磐公民館 主査 赤津 智彦氏

### 1 いわき市の取組みについて

- (1) 福島県の施策『頑張る学校応援プラン』があり、いわき市では、学校・家庭・地域をつないでよりよい学習機会を与えていくために「学校・家庭・地域パートナーシップ推進事業」を展開している。

- 〈3つの柱〉①「わくわくしごと塾」  
②「常磐土曜楽校」  
③「教育活動支援」

### 2 常磐公民館での学校支援の概要について

- (1) 湯本第三小学校「授業コーディネート」 2年生 生活科：「野菜作り名人」の紹介
- ① 支援の様子・・・苗の植え方や手入れの仕方等を地域の名人から学んだ。  
子どもたち→野菜作りの手間を実感し、野菜を食べるようになった。  
講師→子どもたちの姿を見て「関わってよかった」と喜んでいただいた。
- ② 事業効果・・・ア 子どもたちを地域が育てる環境作り。「地域資源の地産地消」化。  
イ 地域の団体（個人）が持つ専門性を学校教育に生かす。  
ウ 学校における事務作業の削減化へ。

### 3 コーディネートの流れ

- (1) 当日までの行程
- ① 学校の意向を聞く→事前打ち合わせ→最終打ち合わせ→講師への依頼・連絡調整→当日へ
- (2) 当日の行程
- ① 〈授業前〉 事前打ち合わせ（講師・学校・コーディネーター）



〈授業後〉 事後の振り返り・意見（感想）交換→報告書にまとめ、今後に生かす。

※ 赤津氏が大切にしているのは、実践を今後の事業展開に生かすこと。

② 赤津氏が先輩から教えられたこと

「コーディネーターは、机で考えていてはダメ。足を使え（現場に行って情報交換をし、人と関わること）。」

③ 「コーディネート計画」を作成する時には、学校側の意向を必ず汲んで作成するようにしている。また、授業終了後は実際の様子や今後に向けての反省点等をまとめている。

#### 4 コーディネートのポイント

(1) 学校のニーズを把握する。

(2) その後も定期的にニーズを把握する。

→教育課程の中で協力できる場所はどこか。

(3) 協力者情報の蓄積をする。

→地域の方と仲良くなり、協力体制を作る。

(4) 学校へこまめな情報発信をする。

→協力者を紹介する。

※ 校長・教頭と「お茶のみ話」ができる関係になる。  
これが「土台作り」になる。



#### 5 コーディネートの課題

(1) 学校（特に、担任や教科担任の先生）と講師側の細やかな打ち合わせをすること。

#### 6 これまでコーディネーターとして実践してきたこと

(1) 地域の仲間（職場の含む）を増やす。

(2) 学校に寄り添い信頼を得る。

(3) 何か特技を身に付ける。

#### 7 結びに

コーディネーターは、「人財（人材）一人ひとりの個性や働きを見極めて、的確に動かし、次の動きにつなげていく役割」である。

## 講 話 『支援』から『連携・協働』へ』

福島市教育委員会生涯学習課 生涯学習指導員 佐久間敏彦氏

### 1 学校支援地域本部事業の状況をふりかえり

(1) 組織的な取り組みをめざし ※ 平成 28 年度市内全小・中学校を対象にスタート。市内 16 学習センターが地域本部となる。

① 福島市の強みは、各学習センターに「生涯学習指導員」が配属されており、学校支援活動のコーディネートを行っていることである。

② これまでの実施状況（H30 年度実績）

ア 実施している学校数

小学校・・・49 校中 41 校実施→ 順調に増加している傾向にある。

中学校・・・20 校中 6 校実施→ 頭打ち状態になっている。学校支援と中学校の教育課程がマッチングしていないことの表れである。

イ 実施日数・のべ学級数

順調に増加している。しかし、それだけでよいということではない。「量」ではなく、「質はどうか」の振り返りが必要がある（授業の質、教師の負担軽減、運用方法等）。

ウ ボランティアの登録者数

現在、645名登録している。以前から行っている方が継続して登録しているため、登録者数が増えている。これは、各学習センターのネットワーク力のおかげである。

エ 表出してきた課題（ボランティア対象アンケート調査：自由記述より）

- ・ 交通費が出ない。←制度上出すことができない。
- ・ 打ち合わせ不足 ←学校に打ち合わせができる時間がない。ボランティアは、もっと打ち合わせをしたいと思っている。
- ・ 事後の対応←ボランティアに子どもたちからの感想を届けたり、教頭等からのお礼の電話などがあると、ボランティアの方もやりがいを感じて、快く協力して下さる。

(2) 運営上のポイント

① 当初面談（4月）と年度末の振り返り（2月）

ア 学校の意向を組んで活動できるように、学習センターのコーディネーター（生涯学習指導員）が、担当校の校長・教頭と面談をする。

イ 最初に顔合わせをすることをとても大切にしてほしい。

ウ 年度末にコーディネーター（生涯学習指導員）が校長と一年間を振り返り、成果と課題を明らかにする。

エ 市内の16学習センターの結果を取りまとめる。これを次年度以降に生かす。



② 実践事例の情報提供と共有

ア 他の学校にも、市内の小・中学校での実践を紹介する。

③ 評価検証と結果公表

ア 「実践のやりっぱなし」では、学校とのパイプが切れてしまう。

イ 多面的な評価（学校の評価、ボランティアの評価、学習センター側の評価）をする。

それぞれの評価を集めて、総合的に検証することが大切である。

ウ 今後「児童生徒の評価」と「保護者の評価」をもっと大切にしていかなければならない。

エ 「市政だより」等で、地域の方へ伝えることも大切である。

オ 教員への周知や意識の高まり、教員の負担軽減、児童のよりよい変容のためには、さらなる努力が必要である。

カ 学習センター側からみると、学校側との関係性が向上し、さらなるつながりが生まれている。地域への周知と地域人材の活動がこれからの課題である。

(3) これまで明らかになった課題

① 「人材を全市的に活用できないか」という要望。

→ 旅費が出ない、ボランティア協力者が「〇〇地区のボランティア」として登録している等の理由のため、人材を市内で共有することは難しい。

② 職員等の異動を視野に入れた対応

→ 学校として継続的な活動するために、12~2月にかけて次年度の教育課程に明記する。

③ 事業の主旨と中学校の教育内容のミスマッチ

→ 地域学校協働活動へのシフトを検討する。



#### (4) 発展型の出現（学校の願いと地域の願いのマッチング）

- ① 三河台小学校・・・6年 総合的な学習「地域の歴史を知る」  
地域（三河台歴史愛好会）の願い→ 作成した歴史マップを活用し、小学校とタイアップしながら地域の歴史・文化を地域に広めたい。
- ② 吉井田小学校・・・防災キャンプ  
地域の願い→子どもたちにこれからの地区のリーダーになってほしい。
- ③ 清明小学校・・・防災フィールドワーク  
地域（町内会）の願い→先人の知恵と最新の水防設備を子どもたちに知ってほしい。
- ④ 松陵中学校・・・1年 総合的な学習「職業人に聞く」  
地域の願い→松川地区のために力を尽くせる大人になってほしい。  
身近なところで、職業に憧れを持ってほしい。



こういう姿が、今後の「地域学校協働事業」への橋渡しになる。

### 2 地域学校協働本部事業のスタートにあたり

#### (1) 学校現場から事業を見る

- ① 理念浸透の難しさ
  - ア 必要感が学校、職員など人や立場によってバラバラである。
  - イ 学校によって余裕があるところと、ないところがある。学校の状況はさまざまである。



学校側の状況をきちんと把握しなければならない。学校側から事業を見ることが大切である。

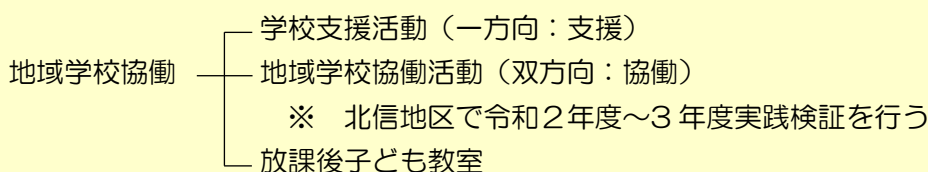


#### (2) 福島市としての考えを構築する

- ① 国が描いている「地域学校協働本部事業のデザイン」を福島市ではどのように行っていくか。



学校支援本部事業とのすみわけをする



#### (3) 組織的な取り組み

- ① 北信地区を地域学校協働本部事業の推進モデル地区に委嘱する。  
（北信中・鎌田小・瀬上小・余目小・矢野目小）
- ② 年に2回本部会議を開催し、学習センター、行政、学校側の連携強化を図る

#### (4) 今後の方向性

- ① 今後、北信地区の2年間の実績を踏まえて成果を他地区の実践に生かす。

### 3 おわりに

#### (1) 手段と目的

- ① 手段が「目的」にならないようにする。手段ばかりに目をとられてしまい、本来の目的（地域コミュニティ強化、地域教育力、人づくり等）を忘れてしまってはいけない。そのために、ふり返りをしっかり行い、課題を持って取り組むこと。
- ② 今後、各学校が主体的にできるようになることが最終的な目標である。

## (2) 現場を大切に

- ① 現場を大切に実践を積み重ねていくこと。

### 研修会の感想（参加者アンケートから）

- 地区としてこれらの活動の幹を太くし、枝を伸ばしていけるように社会に開かれた教育課程にしていかなければならないと思います。
- 学校と地域の連携の大切さを理解できました。地域全体で子どもたちを育てていくことが重要と感じました。
- 「つなぐ・育む・地域のコーディネーターとして」については、具体的な手立がよく分かりました。今後に生かしていきたいと思います。午前中のグループ協議も勉強になりました。
- 様々な教育活動の中から学校だけでは担いきれない事柄を洗い出し、それに合ったボランティアの方々の派遣を学習センターに問い合わせをすることを、今後も続けていきたいと思います。学習センターの方々もボランティア人財（人材）発掘が大変なお仕事だとは思いますが、多様な人材の確保、学校への紹介など、今後ともよろしく願いいたします。
- 常磐公民館の赤津さんのような人が自分の地区にいとありがたいと感じました。赤津さんがやっているようなことを自分も学校でやろうとしているが（地域の方とのつながり作りなど）、なかなか時間が取れず、仕事も忙しくできていません。教員以外の方で、こういったことをやってくださる方を全学校に配置してほしいです。
- 佐久間先生の話で、学習センターの強みについて話があったが、自分の地区にはそれがないので、教員に負担がきてしまっています。できることならば、学校の中に学校と地域をつなぐことを専門とする人材をおいてほしいです。
- 「地域学校協働連携」の意味やめざすものがよく見えてきました。コーディネーターとして仕事をするには、教職との兼務は難しいと思います。学校に単独でコーディネーターがほしいと思いますが……。地域コーディネーターのみならず、学校の中に他の〇〇教育（例えば「国際理解教育」など）にも、計画の涉外や連携を図る職員がほしいです。
- 中学校と地域の関わりについては、夏休みにサマースクールなどを行ったり、その地域出身の大学生などに学習を教えてもらったりすることもありだと思えます。他の地区や他県などで成功している例を見るといいと思います。

